

高等讀本

山縣悌三郎編纂

二

高等讀本

山縣悌三郎編纂

山縣悌三郎編纂

二

T1A3  
10  
(Y22)

山縣悌三郎編纂

# 高等讀本

明治二十七年四月十日  
文部省書檢定所學校科用書

文學社

高等讀本卷之二

## 目次

- |     |              |   |
|-----|--------------|---|
| 第一課 | 伊勢の大神宮       | 一 |
| 第二課 | 三種の神寶        | 二 |
| 第三課 | 皇太子冊立        | 三 |
| 第四課 | 新井白石の傳 其一    | 四 |
| 第五課 | 學問           | 五 |
| 第六課 | 新井白石の傳 其二    | 六 |
| 第七課 | 天ハ自ラ助クルノ人ヲ助ク | 七 |

高等讀本



第八課 新井白石の傳 其三

三十一

第九課 鑑師の話

三十二

第十課 新井白石の傳 其四

三十三

第十一課 全國漫遊 其三

三十四

第十二課 身は世をわたる舟 貝原篤信

三十五

第十三課 全國漫遊 其四

三十六

第十四課 名家の手簡 安積良晴

三十七

第十五課 植物の話 其二

三十八

第十六課 佛教の傳來

三十九

第十七課 聖德太子

四十

第十八課 人は遠き處あるべし

四十一

第十九課 海水浴

四十二

第二十課 寒暖計

四十三

第二十一課 孝養の訓 貝原篤信

四十四

第二十二課 孝感 其一

四十五

第二十三課 孝感 其二

四十六

第二十四課 改過 伊勢貞丈

四十七

第二十五課 土人ノ智慧

四十八

第二十六課 植物の話 其三

四十九

第二十七課 義狗

五十

第二十八課 孟子の母

四十九

第二十九課 讀書の樂 貝原篤信

五十

第三十課 曲亭馬琴

五十一

高等讀本卷之二

第一課 伊勢の大神宮

我が大日本帝國の皇室は神の御末にして二千五百有餘年の久き一系をもつて續かせるれ百二十二代 今上天皇陛下に至らせらるる世界廣く萬國多しと雖もかゝる例は決して他にあるべからず。されば異國人の我が國をたゞへて君子國と云ひしも實に宜なりと謂ふべし。抑も伊勢の大神宮と申し奉るは、亦も日本歴



代の宗廟國家鎮護の尊神にして、地神五代の祖天照大神をいつき祀れるなり。かくこき天皇の御血統連綿としてどこになへに天津日つぎの彌遠く幾萬代も限りあるべからず。萬物この御神の御めぐみを受けざるものなり。彼の西行法師の

何事のれはしますかは知らねども

かたけけなさに涙こぼるゝ

と詠まれしを見て、その尊き程を伺ひ奉るべきなり。

### 第二課 三種の神寶

三種の神寶とは、八咫鏡、叢雲劍、八咫瓊勾玉是なり。畏くも御代々の天皇御位に即かせ給ふ時は、先づこの神寶を受けさせ給ひて、後御即位あるが御恒例なり。故に之を傳國の御璽とは申し奉る。むかし天照大神皇孫瓊々杵尊に、この神寶を授け給ひしが、是より八咫鏡は、大神の御靈代なりとて、御殿の内に祀りて崇め奉り、叢雲劍も均しく之を奉戴し、八咫瓊勾玉は、御代々天皇の

高等讀本 卷之二十一 支那の歴史  
御譲りとなり給ひて常に御床を共にし玉體を  
離し給はず。

崇神天皇の御代に至りて神威を瀆さん恐あ  
りとして三種の神寶中寶鏡と靈劔とを大和の笠  
縫邑に遷し奉り社を立て、之を祀らせ給ひ別  
に此二物を模造せしめられ之を殿内に安置し  
給ふ。後垂仁天皇の御代に至りて更に笠縫邑よ  
り伊勢の宇治に遷し奉らしめ給へり。今の内宮  
是なり。

靈劔は日本武尊東夷御征伐に際し之を佩び

給ひしが夷賊の火攻にあはせ給ひし時之を以  
て草を薙拂ひ危難を逃れ給ひしより改めて草  
薙の劔といふ。後遂に尾張の熱田に留め祀らせ  
給ふ。今の熱田神社是より。

### 第三課 皇太子册立

明治二十二年十一月三日、明宮嘉仁親王殿下  
皇太子に立たせ給ふ。殿下は明治十二年八月三  
十一日の御降誕にて二十年八月三十一日儲君  
とならせ給ふ。其皇太子に立たせ給ひし時は御



年十年四ヶ月にたはしませり。その時の詔に曰く

朕祖宗ノ遺範ニ循ヒ、嘉仁親王ヲ立テ、皇太子ト爲ス。茲ニ之ヲ公布シ、周ク知悉セシム。又御先例によりて、壺切の御劔を傳へさせ給ひ、左の勅語あり。

壺切ノ劔ハ、歷朝皇太子ニ傳ヘ、以テ朕ガ躬ニ追ベリ、今之ヲ汝ニ傳フ。汝其レ之ヲ體セヨ。尋で東宮職を置き、其官制を定めらる。

抑、我が皇太子殿下は、聰明の御性質にたは

まゝてはやくより學習院にて文武の兩道を御修業遊ばせられ、兩陛下に對しては、御孝心厚く、臣下に對しては、仁慈の御心深く、又同學の諸王に交誼を厚くし給ふにより、皆其御德を仰ぎ奉らぬはなると承る。實に有りがたき御事ならずや。

第四課 新井白石の傳 其一

新井白石は江戸の人にて、父を正濟といひ、久留里侯土屋利直に仕ふ。明暦三年二月に生れ

高等讀本 卷之二 四 文 學 一  
が。此正月に江戸大火あり、久留里侯の邸宅も焼  
け失せければ、假屋に移りて住ひけるに、其をり  
生れたる故、幼きほどは、火の兒と呼ばれたり。三  
歳にして字を書くことを知り、四五歳の時は、年  
長ぜる人々と與に太平記の講釋を聞き、其義を  
請ひ問ふ事などもあり。六歳の夏に、七言絶句の  
詩を習ひ、立どころに覺えて、其意まで尋ねけり。  
かゝる穎悟なる性なり。かば、侯も痛く之を愛  
し、常に膝下に置きて遊ばしめられたり。

或る人、白石の聰慧を見て、其父に向ひ、「いかに

も師を擇びて學ばしめらるべし」と勸めしに、主  
君の御いつくしみあつく、常に御側を離し給は  
されば、學に入れ、師に従はしめん事も叶ふ可か  
らず。されども、せめて物をば書き習はせたり」と  
て、八歳の秋より手習ふことを教へけり。然るに  
其冬の末よりは、又侯の傍に侍らふことの免れ  
難かりければ、翌年の秋より課を立て、日の中に  
は行草三千字、夜に入りて一千字を限りて、書く  
べき由父は命じたりき。その自ら著せる「折たく  
柴の記」に當時の事を記して曰く、





白石字の習ふ

冬に至りぬれば  
日短くなりて課  
はまだ満たざる  
に日暮れんとす  
る事度々にて西  
向なる竹縁のあ  
る上に机を持ち  
いで、書き終り  
ぬる事も有りき。又夜に入りて手習ふに、睡の  
催ほして堪へがたきに、我に附けられし者と

ひそかにはかりて、水二桶づゝかの竹縁に汲  
みれかせて、いたく睡りの催ほしぬれば、衣ぬ  
ぎすて、まづ一桶の水をかゝりて、衣うちき  
て習ふに、初めひやゝかなるに目さむる心地  
すれど、しばし程経ぬれば、身暖かになりて、ま  
たく睡くなりぬれば、又水をかゝること前  
の如くす。二たび水をかゝりぬる程には、大や  
うは課をもみてたりき。是れ我が九歳の秋冬  
の間の事なり。

其苦學かくの如くなりしかば、業の進むこと著

高等讀本 卷之六 六十一  
るゝく此頃よりは父の贈答する手紙の代書をもなす十三の時よりは久留里侯の代筆をも務めたり。

十一の時或る名人に頼み太刀打の業を教へられんことを望みゝに「なほ幼し是等の技學ばんこと早し」と云ふ。白石「されど太刀つかふ事少しも心得ざらんには万脇差腰にせんこと誠に不用の事に似たり」といひゝかば「誠に然なり」とて其技を傳へたり。是よりは武藝の事を好みて手習ふことなど心に染みずありゝが性來學問

を好みければ其後は讀むことを専として我が國の物語草紙等の類をば見ずといふものもなかりき。十七歳の頃より小學四書五經等を誦し習ひ文章詩賦の類をも學びぬ。されどこれら皆句讀を受けし師あるにもあらず自ら字引等によりて獨學せしのみ。

#### 第五課 學問

學問とは書を讀みて人の人たる道を學ぶことなり。其奥義を窮むるはたやすき業にあらぬ



高橋 蘭本 卷之三 七 才學  
ども一向に學問なきは不自由なるものなれば  
人と生れし上からは少しは覺に置きたきもの  
なり。誰にても少し學べば萬の事自由を得て人  
品も言語も自ら優美に趣き人にうやまはるゝ  
ものなり。故に孔子の言に行有餘力則以學文と  
あり。此こゝろは誰にても業務のいとまにはひ  
たすら學問せよと教へ給ふ詞なり。いかにいと  
まなき身なりとも志だにあらばいぬる間の少  
しを缺きても書を讀むひまのなかあらざら  
んや。又晝の中に何程事しげき身なりとも少し

づゝの暇は必ずあるべきものなれば其暇を徒  
らに過さず學問の事に用ひて物の道理を辨ふ  
べし。

第六課 新井白石の傳 其二

白石二十歳の折久留里侯利直うせられけれ  
ば程なく父正濟は仕を辭したり。嗣君頼直は無  
道の君にて正濟の祿を奪ひ白石を他家に仕ふ  
ること相成らずと申し渡して放逐せり。時に年  
二十二歳なりき。されば今はたよるべき方もあ

高等書本 卷之二 八  
らざれば、小さき長屋を借りて此に住ひ、朝夕書を講じぬる人の許に行きて之を聴き、貧しき月日を送りけり。當時江戸に名高き富豪に河村瑞軒といふものあり。白石を見て尋常の人にあらざるを知り、女を以て妻さんと欲し、其子をして白石に曰はしむるやう、我が父、足下を見まゐらせて、必ず天下の大儒ともならせ給ふべき御方なれば、我が亡兄の女をめあはせ参らせ、黄金三千兩に求め得し宅地をもて、學問の料となし、もの學び給ふやうにとの事に候ふと白石之を聞

きて、御志のほどは忘るべからず、さりながら我昔或る人の申し、言を聞きしに、夏の頃、靈山に遊びし人ありて、此處の池に足をひたして居けるに、小さき蛇の來りて、其足の指を舐ることありしが、忽ちに去り、又忽ちに來り、舐ること度々なりしに見るく、其蛇大きくなりて、後には大指を呑むばかりになりしかば、腰より小刀を取出して、刃の方を上にして、大指の上にあて、其來るを待ち、今や大指を呑まんとする所を、ブツとさし切り、うしろざまに飛び去り、家



に駆け入りて、障子をさす。伴ひし者ども何事にやといふ程こそあれ、石走り木倒れ地震ふこと半時許り過ぎて、障子をあけて外を見るに、一丈餘りの大蛇の唇の上より頭の方まで一尺餘切れたるが、斃れ死したりといふ事ありと。其事の有りや無しやは未だ知らぬと今のたまふ言に似たる所あり、初め其蛇の小さき中は僅に小刀にて切りし疵も既に大きくなるに至りては一尺の大疵とはなりぬ。我今身貧しくて人の知れるものもなければ、足下の亡兄のあとを承け繼

ぎたりとも其疵實に小なり。されども若しのたまふ所の如く幸にして世に知らる可き程の儒者どもなりなんには、その疵は誠に大にこそなりぬべけれ。三千兩の大金を棄て、大疵ある儒者をこゝらへ給ふことは謀を得たりと謂ふ可からず。縦ひ小さくとも我も亦疵を蒙らん事を願はず。我かく申したりと父君に告げ給へといひたりとなん。世には才もあり學問もありといはるゝ人の黄金の爲には其志を枉け、或は父母に忤ひて他家に入り、或は糟糠の妻を捨て、豪

家の娘を娶り、揚々として自得せるもの多し。白石の風を聞かば、さすがに心に耻づるなるべし。かゝりし程に、白石は日に増し貧窮に陥りしが、更に之を心に掛けず、苦學愈懈らざりしかば、程なくして、冷く諸子百家の書に通ずるに至れり。

第七課 天ハ自ラ助クルノ人ヲ助ク

自ラ助クト云フコトハ、能ク自主自立シテ、毫モ他人ノ力ニ倚ラザルコトナリ。自ラ助クルノ精神ハ、凡ソ人タルモノ、品位ヲ高クシ才能ヲ

増ス所ノ根源ナリ。推シテ之ヲ言ヘバ、自ラ助クルノ人民多ケレバ、其國必ズ強盛ニ至ルベキナリ。

安佚驕侈ハ、人ノ才德ヲ修養スル所以ノモノニ非ズ。故ニ古ヨリ今ニ至ルマデ、天下ノ利邦國ノ益ハ、貧賤困苦ノ間ヨリ起レル人ノ力ニ賴ルコト甚ダ多シ。蓋シ富貴ノ家ニ生レテ、安佚驕侈ニ慣レタル人ハ、自ラ奮勉剛毅ノ氣象ニ乏シク、艱難ニ耐ヘ事業ヲ成スコト能ハザルモノナリ。故ニ古人モ艱難ニ遭ハザルハコレ人ノ不幸ナ



リトイヘリ。サレバ人々苟モ安佚驕侈ノ念ヲ生  
ズルコトナク、自ラ助クルノ精神ヲ勵マシ、多ク  
ノ艱難ニ打勝ダンコトヲ心懸クベシ、若シ能ク  
此ノ如クナルトキハ、自己ノ品位ヲ高クシ、才能  
ヲ増シ、世人ノ尊敬ヲ受ケテ幸福ヲ得ルコト鮮  
カラザルベシ、天ハ自ラ助クルノ人ヲ助クトノ  
諺ハ、深ク味フベキコトナリ。

第八課 新井白石の傳 其三

白石二十三歳の時に至りて、久留里家滅び

かば、自ら仕途を開け、二十六歳の春より、古河侯  
堀田正俊に仕ふ。時に朝鮮の使來朝せし、かば其  
作る所の詩を示し、又唱和等をなす。に韓人大  
に感服し、其詩集に序を書きて與へたり。其後木  
下順庵とて、當時に名高き學者の弟子となりて、  
學問文章愈ます。進みけり。三十五歳といひ  
し秋に、故ありて仕を辭せしが、此時家に餘れる  
資財を計り見るに、青銅三百文と白米三斗には  
過ぎざりき。これより淺草の邊に借宅して、益貧  
困の中に苦學し、更に漁ることなり。或る人之を



高等讀本 卷之二 三十一  
見て白石に向ひ「足下は家も滅びたる久留里家より出でたるが上に世に用ひられざる木下の門に學び給ふは誤なり。たとひ學優なりとも身を立て給はん事難かるべし。あはれ其師をかへて出世を圖り給へか」といふ。白石打笑ひて答へざりしが二たび三たびに至りていふことやまざりければ「我が爲ありから」とてかくはのたまふなる可けれども其のたまふ所眞實我が爲よからん事にあらず。昔孔門の人々の事は聞きも及び給ふらん。若し其師の時にあはざるが

爲につかふる所をあらたむべき道あらんには彼の人々何を苦みてか陳蔡の間にまで相從ふ事の候ふべき。凡そ人の報ゆるに死を以てすべきもの三つ、父と師と君となり。我今父既に死して、また事ふる所の君もなし。唯我が死を致すべきは唯師一人なり」と答へたり。一貧一富乃知交態と古人もいひたりしが人の盛衰によりて交りの道をも變ずるは世俗の習なるに義によりて動かざること白石の如きは稀なり。やがて順庵白石を加賀侯に薦めんとて粗定まりしに加

高橋 賀の人にて岡嶋忠四郎といふ者白石に頼みて  
「僕多年遠遊すれども不幸にして未だ志を得ず  
而るに我が母は年既に老いて切に僕の歸るを  
待てり。いかにもして此事を先生に乞ひ仕途を  
求め給はるべし」といふ。白石其事のよきを順庵  
に告げ且曰く「某仕に従はん事は、いづれの國を  
も撰ばず、彼の人には老いたる母の候ふ國にて侍  
れば、某に代へて薦められんこと某の望む所な  
り。今日より某を彼の國に薦められんこと固く  
辭し申す」とのよきを申しきりてければ、順庵つ

くくど之を聞き、今の世に何人かかゝる事を  
ば申すべき古人を今に見るとは、かゝる事にこ  
ろといひて涙を流しけり。やがて順庵は岡嶋を  
加賀侯に薦めたりとぞなん。

其後二年を経て、白石三十七歳の時、順庵舉げ  
て徳川家宣に仕へしむ。家宣時に未だ將軍とな  
らず、江戸なる甲府の藩邸にありしかば、白石日  
々進みて經史を講じ、旁ら政治の得失等をも上  
言せしに、殊に其意にかなひ、甚だ敬ひ重んぜら  
る。或る時火災の爲に其家焼け失せたりしかば、

假屋建つ可うとて殊に黄金五十兩を下し賜はりしに其金をもて屋舎什器を作らんにも此處火災屢行はれぬれば又焼失する事もあらん。さらば此恩も終に空しくなりぬべし。いかにも計らふべき事こそあるべけれどて此五十兩を以て鎧一領を織さしめたり。是れ死を以て特恩に報いまゐらせん時用ふべきが爲なりとぞ。其後五年を経て果して復た火災に罹りしに屋舎等は焼失せしも其鎧をば身に從へし程に恙なかりしとなん。白石が忠節の程こそ思ひやらるれ。

第九課 鎧師の話

鎧師とは鎧を造る人なり。今は鎧を用ふることなければ之を造る人もあらざれども昔は尤も大切なるものとして造らるむる人は大金を掛け造る人は丹精を凝らして箭も透らず鎗刀にても貫けず斬れざる大丈夫のものを貴とせり。

徳川幕府の初めの頃或る諸侯一人の鎧師を呼び寄せ、汝が造れる鎧は堅固なりとは聞けど



余が強弓の箭には堪ふまゝと曰ふ。鎧師からか  
らと笑ひ、鎮西八郎が弓は知らず、今日の射手が  
引く弓は高の知れたることに候ふ、其箭に裡か  
く位の鎧何の用にか立ち申すべき、鎧は弓刀を  
拒ぐ爲にこそ造れと、矜り顔に答へければ、侯は  
憎き廣言かなと心に怒り、汝が言葉偽なくば、余  
射試みん、汝箭面に立つべきやと曰へば、心得候  
ふ、何處なりとも思ふまゝに射給へと言ひも了  
らず、己が造りし鎧を取りて、身にかけ、箭面に立  
ちければ、侯は、無益の殺生好まうからぬと望み

とあらば射て遣はさん、とて弓を取りて満月の  
如く引きしぼり、切て放ては、過たず胴の真中に  
當ると見ゆゝが、箭は立たずして、四五間ばかり  
飛び返る、よしさらば背を向け、射て遣はさんと  
叫べば、鎧師慌たゝゝく鎧を脱ぎ棄て、侯の前に  
跪き、仰せには候へども、拙者鎧を造るに、臆病者  
や、逃武者の爲には造らず。されば背を射試みら  
れ候ふことは、御免あれと答へけりどぞ。

第十課 新井白石の傳 其四

元祿十四年白石仰せを蒙りて列侯の系譜を撰む。七月に草を起し十月に成る。事は慶長五年に始まりて延寶八年に至るまで八十年の間三百三十七家の始封襲封廢除等備に載録し十三卷二十冊としたるものにて事實文章兩ながら優れたる書なり。乃ち之を奉りしに家宣自ら藩翰譜と題せらる。寶永六年家宣入りて幕府の統を繼ぐに及びて白石祿五百石を賜はり侍講となりて左右に給事し事大小となく諮はせらる。八年に従五位下に叙し筑後守に任ず。此年朝鮮

の使來りければ白石に命じて之を接待せしむ。然るに戰國より以來もろくの禮法廢れ果て外國に對する禮式の如きも其正しきを失ひ我の彼に對する僕の主に於けるが如く彼の我に對する主の僕に於けるが如く其懸隔殊に甚しかりしかば白石大に之を慨き是れ禮法を知る者をなきより此に至りしなり。今に於て改めずんば永く國の耻辱となるべしとて幕府に建議し且大に彼の使と論諍して遂に彼を挫きこゝに禮法を正うするを得るに至れり是れ實に白

石が事業中の一大偉功なり。其功を以て祿千石となる。此外金銀改鑄、互市海舶等の事まで、皆其議に參與して、幕政を輔佐したるの功、枚舉に遑あらず。正徳三年、家宣薨して、家繼統を繼ぎ、幾程もなく薨す。白石も亦漸く年老いて、當世に意をかりければ、遂に門を杜ぢ、客を謝し、日夜吟詠をもて樂みとなり。享保十年六十九歳にて歿しぬ。其著す所の書三百餘種の多きに及び、孰れも皆有用ならざるはなし。古來の典故に詳なるが上に、識見の高きこと、白石の如きは、我が國の儒者に

に極めて稀なる所なり。殊に眼を西洋の文物に注ぎ、夙に蘭學を修めたるは、實に白石を以て嚆矢となすといふ。

然るに白石晩年に至るまで、常に自ら學問の足らざること、を嘆きて止まざりき。其折たく柴の記に曰く、

昔我三歳なりし時より、物書く事をうれる初めに、しかるべき師といふものもありなむには、かく書に拙き身にもあらざり。又六歳の時より、詩を誦し習ひし事などありし時より、從



ひ學ぶ所もありなば文學の事もすこしく進む事もありなまゝ。まゝて十七歳の時より斯道にこゝろざし時より教へ導く人も有りなむには今の我にもあらじ。我れ藩邸につかへまゐらせし後に至りてこそ自らも書籍を求め賜はりし所も多くはなりたれ。されども身既に仕に従ひしかば書を見るべき暇も多からず。是より先には身常に貧しくして然るべき書どもをば人に借求めて見もし又しるし置くべきものどもをば手づから寫し、ほ

どに我が見たりし書とても多からず。されば學問の道に於て不幸なる事の多かりし事我にいくもの有るべからず。かほどまでに學びなりし事は常に堪へがたき事にたふべき事をのみ事として世の人の一たびし給ふ事をば十たびし十たびし給ふ事をば百たびせしによれるなり。

と。以て其幼時より心懸の常ならざるを想ひ見るべし。

## 第十一課 全國漫遊 其三

余ハ神戸ヲ發シテ直チニ山陽道ニ入ラント  
欲セシガ會一友ニ逢ヒ頻ニ有馬溫泉ニ赴カン  
コトヲ勸メラレシカバ俄ニ赴キ浴セリ。有馬ハ  
神戸ノ北五里ニ在リ。時方ニ盛夏ナリシガ爲ニ  
浴客甚ダ多シ。秋冬ハ病客ニアラザレバ來浴ス  
ル者少ナシト云フ。此地竹細工毛筆ノ名産アリ。  
翌日再ビ神戸ニ歸リ山陽鐵道ノ汽車ニ乘リ  
備前岡山ニ向フ。攝津ノ須磨一ノ谷ヲ經テ播磨  
ノ舞子濱明石浦ヲ過グ。此邊白沙青松相連リ近

ク淡路島ニ對シ遠ク紀伊和泉ノ諸山ヲ望ミ風  
景殊ニ佳ナリ。柿本人丸ノ歌ニ

ほのくくと明石の浦の朝霧に

島がくれ行く舟をうづ思ふ

播磨ノ都會ヲ姫路トイフ。神戸ヲ距ルコト三十  
四哩餘中國及ビ西國ヨリ京畿ニ至ル要路ニ當  
レリ。此地ヨリ北スレバ但馬丹後ノ諸國ニ達ス  
ベシ。鐵道ハ姫路ヨリ龍野三石ヲ經テ岡山ニ達  
ス。岡山ハ北ニ金山ヲ負ヒ東ニ旭川ヲ帶ビ兒島  
灣ニ接ス。灣ハ藤戸ノ地峽ヲ以テ備中ノ南端ニ

連レリ。常山ニハ、兒島高德ノ城趾アリ。

余ハ、岡山ヨリ汽船ニ搭シ、讃岐ノ多度津ニ渡リ、汽車ニ乗リテ、有名ナル象頭山ノ琴平神社ニ參詣セリ。多度津ノ東ニ丸龜アリ、廣島師團分營ノ在ル所ナリ。丸龜ノ東ニ高松アリ、香川縣廳ノ在ル所ナリ。高松ノ海上ニ屋島アリ、源平ノ古戰場ヲ以テ著ル。淡路ノ門ノ岬ト阿波トノ間ニ有名ナル鳴門海峡アリ、大鳴門、小鳴門ノ稱アリ、海水渦ヲナシ、舟行最モ危險ナリ。四國三郎ト呼バレタル吉野川ノ河口ニ德島アリテ、四國第一ノ

都會ナリ。此行徧ク是等ノ地ニ遊ブテ得ザリシハ實ニ遺憾ノ至ナリ。乃チ多度津ヨリ復タ汽船ニ乗リテ、伊豫ノ三津濱ニ渡ル。此間ノ海水ハ謂ハユル瀬戸内海ニシテ、淡路ノ松尾崎ヨリ長門ノ壇浦ニ至ルマデ、直徑百餘里、東ニ播磨洋アリ、西ニ周防洋アリ、其間ニ水島洋、懸洋、硫黃洋アリ、數百千ノ島嶼散在シテ、風光ノ佳ナルコト世界無比ト稱スベシ。三津濱ト松山トノ間ニハ、簡易鐵道ノ設アリ。松山ハ愛媛縣廳ノアル處ニシテ、其近傍ニ道後ノ溫泉アリ。古來有名ナルヲ以テ、

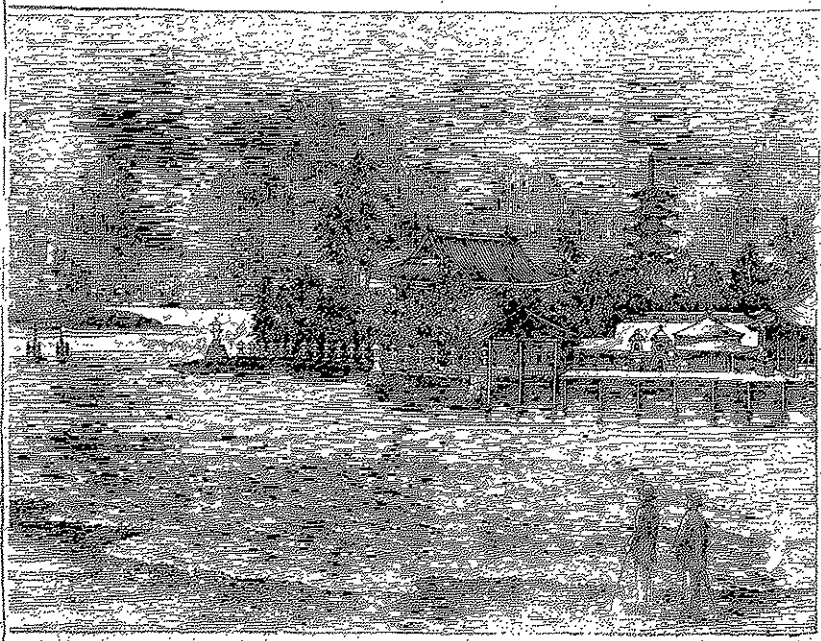


余モ一浴ヲ試ミントテ此ニ一泊ス翌日三津濱  
ヲ出帆シテ安藝ノ廣島ニ向フ。

船中ニ廣島ノ商人多シ。其中一人ノイフ。廣島  
ハ山陽道第一ノ都會ニシテ世人中國ノ大阪ト  
稱スト。大阪ヨリ此地ニ至ル海程九十里アリ。市  
街ハ太田川ヲ挾ミテ人家甚ダ稠密ナリ。聞ク出  
雲ノ松江ハ最モ繁華ノ地ニシテ其山陰道ニ於  
ケルハ猶廣島ノ山陽道ニ於ケルガ如シト。此行  
遊ブ能ハザリシヲ憾トス。廣島灣ニ嚴島江田島  
アリ。江田島ニ海軍兵學校アリ。又此灣頭ニ吳軍

港アリ鎮守府ノ一ナ  
リ。

余ハ廣島ヨリ小舟  
ニ乘リテ嚴島ニ遊ブ。  
島ニ市杵島姫ノ社ア  
リ。宮殿ハ平清盛ノ造  
營セシ所ナリ。崖ニ倚  
リ水ニ架シ潮満ツレ  
バ殿廊水上ニ浮フガ  
如シ。即チ日本三景ノ



一ト稱セラル。余ハ嚴島ヨリ周防ニ航シ岩國ノ錦帶橋ヲ觀ル。橋ハ岩國川ニ架ス。長サ百二十五間アリ。其形算盤珠ヲ列シニ似タルヲ以テ俗ニ算盤橋トイフ。

周防ヨリ長門ノ赤間關ヘ直航ス。此間ニ壇浦アリ。余ノ過グルヤ偶風暴ク浪高シ。源義經ガ平氏ノ一門ヲ殲シタル古ヲ懷ヒ出デ、覺エズ潸然涙ヲ催シタリキ。

赤間關ハ本州ノ西端ニシテ、一錢ノ海水ヲ隔テ、九州ニ對ス。其間僅ニ十數町。隔海豐山呼欲磨トハ是ナリ。内外ノ船舶必ズ此ニ寄港セザルナキヲ以テ、帆橋林ノ如ク汽烟天ヲ衝ク。實ニ我が國西門ノ要港ナリ。

第十二課 身は世をわたる舟

世は海なり。身は舟なり。志は舵なり。舵をあゝくどれば行くべき方に行かず。風波にあへば舟くつがへるが如し。志のもちやう肝要なり。あゝく志を持てば身をくつがへず。舵のとりやうあゝくして舟をくつがへすが如し。

良原篤信……大和俗訓

第十三課 全國漫遊 其四

九州ハ古ノ謂ハユル筑紫ノ地ナリ。余ハ赤間關ヨリ早鞆ノ瀬戸ヲ渡リテ、豊前ノ小倉ニ達ス。小倉ヨリ道岐レテ二ト爲ル。其東海岸ニ沿ヒテ大橋中津、宇佐ノ名邑ヲ過ギ、豊後ニ入ルヲ豊後路トイフ。宇佐ハ、宇佐神宮ノ在ル所ナリ。余ハ小倉ヨリ汽車ニ乘リ、福岡ニ出ヅ、福岡ハ元福岡博多ノ二驛ナリシガ、今ハ合シテ福岡市ト稱ス。其

博多ハ有名ノ良港ニシテ、日々神戸大阪ト汽船ノ往復アリ。箱崎香椎ノ神社ハ、海ニ臨ミテ風景頗ル佳ナリ。此邊ハ、昔北條時宗ノ元寇ヲ殲シタル所ナリ。

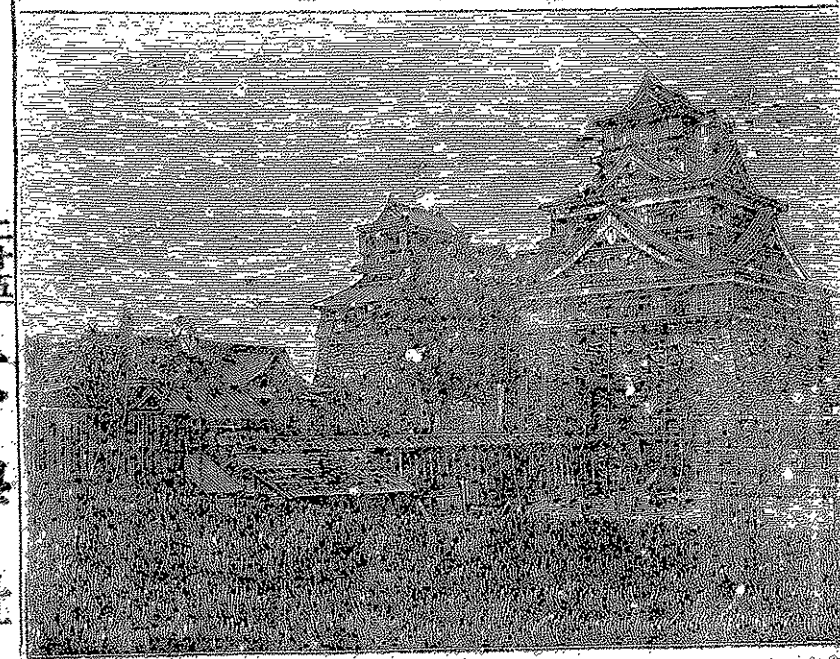
福岡ヨリ南方五里ニ太宰府アリ、古九州ノ鎮アリ。又此地ハ菅公ノ謫セラレシ處ニテ、天満宮ノ社及ビ都府樓ノ遺趾アリ。天拜山其西ニ聳ユ。鳥栖驛ヨリ鐵道岐レテ肥前ノ佐賀ニ達ス。此間十五哩餘アリ。余ハ佐賀ヨリ東南筑後ニ入り、柳河ニ着ク。其間ニ筑後川アリ。此川ノ沿岸ハ九州



中最大ノ平原ナリ。之ニ亞グ平原ハ、肥後ノ菊池川、白川、緑川沿岸ノ地方ニシテ、此邊多ク嘉穀ヲ産シ、稱シテ肥後米ト曰フ。柳河ヨリ久留米ニ出デ、汽車ニ乗リテ熊本ニ入ル。久留米ニハ、飛白ノ名産アリ。博多ノ博多織ニ亞グ。其近傍三池ハ石炭ヲ以テ名アリ。肥前ノ高島ト共ニ、其産出頗ル多シトイフ。

熊本城ハ、加藤清正ノ築キタルモノニテ、海内無雙ト稱セラル。西南ノ役、西郷隆盛之ヲ圍ムコト數月ニシテ遂ニ拔クコト能ハザリキ。近傍ノ

植木、高瀬山、鹿等皆當時激戰ノ處ナリ。熊本ヨリ川尻、宇土、八代ヲ經テ薩摩ノ鹿兒島ニ抵ル道アリ、行程五十里ト稱ス。余ハ陸路ノ險ヲ避ケテ、便船ニ乘リ、肥前ノ長崎ニ着ク。此間ハ、筑紫海ニシテ、初秋ノ夜、海上一面



高、等、調、本、  
光ヲ放ツ、謂ハユル不知火是ナリ。蓋シ小動物ノ  
鱗光ナラン、深ク異ムベキニアラス。

長崎ハ、二百四十年來、外國ノ互市場ニシテ、内  
外ノ船舶輻湊シ、市街繁華ナリ。余ハ此ニ留マル  
コト一日、汽船ニ乘リ、鹿兒島ニ直航ス。其天草洋  
ヲ過グルヤ、偶、山陽ノ

雲、耶山、耶吳、耶越、水天髣髴青一髮

萬里泊舟、天草洋、烟橫篷窓、日漸沒、

瞥見、大魚、波間跳、太白當船、明似月、

ノ詩ヲ想起シ、獨リ吟誦シツ、船ハ開聞岬ヲ廻

リテ、鹿兒島灣ニ入ル。西岸ハ即チ鹿兒島市ナリ。  
灣内ノ櫻島ハ、樹色蒼々トシテ、山頂常ニ火烟ヲ  
吐キ、風景頗ル佳ナリ。岸ニ沿ヒテ大隅ニ入り、加  
治木、國府、福山等ノ名邑ヲ過ギ、日向ニ入り、都城  
ヲ經テ、宮崎ニ着ク。日向、薩摩、大隅ノ地方ハ、古ノ  
熊襲ノ國ニテ、殊ニ日向ハ、神代ノ舊蹟多シ。此國  
ノ西南大隅ニ跨リテ、高峯アリ、霧島山ト曰フ。東  
西二峯ニ分レ、東峯ハ矛峯ト呼バレテ、絶頂ニ天  
ノ逆鉞アリ、神代ノ高千穂峯トハ、即チ此山ナリ  
ト云フ。

宮崎ヨリ東海岸ニ沿ヒテ北行スレバ高鍋延岡ヲ經テ豊後ニ入り、再ビ小倉ニ達スベシ。其間山國川アリ其溪間ハ謂ハユル耶馬溪ニシテ羅漢寺ト共ニ絶勝ノ地ト稱セラル。然レドモ豊後路ハ道路險惡ナルヲ以テ余ハ之ニ入ラズ日向ノ細島ヨリ汽船ニ乘リ赤間關ニ航セリ。細島ハ良港ニテ大阪ノ汽船期日ヲ定メテ航海ス。途ニ速吸ノ瀬戸アリ、豊後ノ佐賀關ト伊豫ノ佐田岬ト相對シテ、内海ト外洋トノ口ヲ扼ス。外洋ヲ航スル船舶ハ皆佐賀關ニテ日和ヲ候フトイフ。

余ハ無事ニ九州ヲ一周シテ再ビ赤間關ニ着ケリ。

第十四課 名家の手簡

安積長齋

爾後は素湊相過候先以春暖之節御安全被成御座奉公賀は随而小生無異罷在り所休慮可被下り去年中は御令弟極度御尋ね奉拜謝は初此度私門人齋藤順治と申者奥州人として聖堂に罷在り詩文共に能出来と者此度と毛遊歴に付兼而草津にて御話と天門山



の類都人來見と山相尋度遊歴仕候何卒法對  
面被下地理と處委曲旅指南被下以縁を希い  
石より尊宅と一宿被仰付いほ大幸の至に  
奉存候乍然御迷惑にといほゞ無遠慮法斷  
可被下候小生遊覽仕度存みくとも罷出兼候  
間門人差遣し申し歸都山水と勝承り了り  
何分宜否を希い書外當人口より申上候頓首

三月七日

安積祐助

一萬田玄遠様

格右

第十五課

植物ノ話 其二

動物ハ其身ヲ轉動スルコト自由ナレドモ植  
物ハ他ヨリ之ヲ動カスニアラザレバ其生育セ  
ル場所ヲ離レテ自ラ他ニ移ルコトナク根ヲ地  
中ニ下シ一處ニ定着ス。

植物中或ハ一ノ大ナル根ヲ有スルニ過ギザ  
ルモノアリ甜菜ノ類是ナリ甜菜ハ高ク地上ニ  
挺キ出ヅルコトナク其葉ハ根部ヨリ直チニ生  
出ス又此大ナル根ノ周邊ニハ毛ノ如キ無數ノ



甜菜ノ根

小根附着セリ。

總テ植物ハ樹

木ノ如キ大ナル

モノヨリ、草苔ノ

如キ小ナルモノ

ニ至ルマデ、其根ハ皆數個ニ分レ、其地下ニ於ルノ狀ハ、恰モ地上ノ本幹分レテ、數多ノ小枝トナルガ如シ。

植物ノ重ナル根ヲ主根トイフ。主根ハ宛モ鳥ノ脚ニ異ナラズ。鳥ノ或ル所ニ立チ留マルヲ得

ルハ、全ク其趾ノ作用ナレドモ、其趾ハ通常三個カ、多キモ四個ニ過ギザルナリ。植物ノ主根ニ至テハ、之ニ附屬スル小根數フルニ勝フ可カラズ。植物ノ根、分レテ無數ノ小根トナリ、四邊ニ向フトキハ、宛モ鳥ノ趾ト爪トノ如キ作用アリテ、十分ニ之ヲ支フルガ故ニ、如何ナル暴風ニ遇フモ、容易ニ倒ル、コトナシ。

根ノ作用タル、獨リ植物ヲ支フルノミニ止マラズ、尙ホ此外ニ、地中ヨリ養分ヲ吸收スルノ大切ナル功用アリ。即チ根ハ元來地中ニアルガ故ニ、之

ヨリ水ヲ吸收シ、且水ト共ニ滋養トナルベキモノヲモ得テ、以テ植物全體ノ生長ヲ助クルナリ。サレバ、根ハ植物ノ要スル養分ヲ擇ビ取ルノ明アルモノ、如シ。今試ニ或ル植物ヲ移シテ、養分ナキ地ニ植エナバ、其結果ハ、痛ク損傷スルカ、甚ダシキハ枯死スルニモ至ルベシ。是レ其根ガ養分ナキヲ知ルガ故ニ、吸收ノ作用ヲ爲ササルニ因ルナリ。

根ハ如何ニ深ク地中ニ入り、又岩石ノ上若クハ其周邊ニ纏フトモ、常ニ其本幹ヲ養フベキ食料ヲ其端部ヨリ吸收セザルハナシ。況ヤ初生ノ根ハ、極メテ細小ニシテ、何レニ向フモ甚ダ容易ナレバ、隨テ食料ヲ得易キ場所ニ赴クベキモノナルヲヤ。又根ハ、其端部ヨリ、極メテ少シヅ、發達シテ、各適意ノ方向ヲ取ルモノナリ。

#### 第十六課 佛教の傳來

文學の傳來してより、百七十餘年を経て、紀元千二百年の初め、欽明天皇の御世に、佛教亦百濟より傳來せり。是より先、佛徒渡來し、民間に於て



高等國本 卷之二十一 三十一  
私に其教を弘めんとしたれども當初は目して蕃神と爲し之を信ずる者なかりしが是時に至り百濟王使を遣はして佛像經論等を獻じ上表して盛に其功德を述べたり。天皇之を受けて崇拜すべしや否やを群臣に問ひ給ひしに大臣蘇我稻目は「西蕃の諸國皆已に之を尊信せり宜しく崇拜すべし」と奏し大連物部尾輿等は「我國には古より祀り奉る所の神あり然るにこれをたきて蕃神を崇拜せば恐らくは國神の怒に觸れんと奏す。因て佛像を稻目に賜ひけるに稻目は

大に悦び己が家に安置して厚く信仰し其家を寺と爲して向原寺と呼べり。是れ我が國佛寺の始なり。是より蘇我物部の二氏不和となり互に黨を立て相争へり。

其後百濟よりは頻に佛經僧尼佛工等を獻じ來りけるに稻目の子馬子は父の志を繼ぎて益之を崇信し尾輿の子守屋は最も之を喜ばざりしかば兩氏の不和益甚しく用明天皇の時に至り馬子は厩戸皇子等と謀を合せて遂に守屋を攻め滅ぼし獨り政權を握れり。是より佛教益弘

高 等 國 本 卷 二 三  
三十二  
まり、數年ならずして、全國に寺四十六所、僧八百十六人、尼五百六十九人あるに至れり。

第十七課 聖德太子

聖德太子は、用明天皇の第一の御子にして、御母を間人皇后といふ。皇后太子をはらみて、十月に満ち給ふときたまゝ、宮中を見めぐらせ給ひ、に廐の前に至りて、俄に産氣づきて太子を生み給へり。因て御名をば廐戸の皇子とれほせ奉る。

幼き時より才智最もすぐれたまひき。五六歳の時、御殿の中にて、諸皇子と遊び戯れて口論し給ひけるに、あまりに騒がゝかりければ、御父帝、笞をさげて立ち出で給へり。之を見るより、諸皇子は皆逃げかくれ給ひけるに、太子は一人、御父帝の前に進み出で、笞を受けんとし給へり。御父帝異みて、何故にかくするぞと問はせ給ふに、天には梯をかけても登りがたゝ、地には穴をほりても入りがたゝ、惡き事をなしたる上は、遁るゝ道なきものなり、されば自ら出で、笞を受

け奉らんとしたるなり」と答へ給ひけり。御父帝も之を聞き召して益愛し給へりとす。

太子長ずるに及びて博學多才、且精しく諸の技藝に通じ給ふ。推古天皇立て、皇太子と爲し、政を攝せしめ給ひしが、最も耳敏くして、一時に十人の訴訟をそれく聽きあけて裁判し給ふに、少しも過なきによりて、またの御名を豐聰耳の皇子とも稱せり。

太子深く佛教を信じ、蘇我馬子と謀りて、大に佛道を興し、又朝政を革めて冠位の制を立て、尋

で憲法を定め、曆を用ひて歲月を紀し、國史を撰むなど、後世の模範と爲るべきことを多く創め給へり。

此時、小野妹子を隋國に遣はし給ひしが、太子親ら國書を草して、東天皇敬みて西皇帝に白す。恙なきやと書かせ給へり。蓋し朝廷より支那に使を通ぜられしは、之を始とするなり。其後幾はくならずして、隋亡びて唐の世となり、使者は互に往來し、學生、僧侶、彼の地に留學し、支那の制度、文物を傳習して歸朝する者益多く、遂に大化の



改新をなすに至れり。蓋し是れ皆太子の功に基くものなれば、世に其德を慕ひて稱讃衰へず、聖德太子と謚し奉りしも、まことに故あるなり。

第十八課 人は遠き慮あるべし

つらく思へば、凡そ人の生涯には、圖られぬ事のれこるものにて、先その中に就きて、重なるものは第一、生計をたつべき業に離るゝこと、第二、病みあづらふこと、第三、身まかふこと、是なり。この中、第一と第二とは、其人の心懸によりて、免

るゝを得べけれども、第三に至りては、天命なれば、また如何にとも爲し難かるべし。されば是等不慮の事起ることありとも、己の身并に己にたよる妻子眷族の衣食住に事缺かぬやうに、豫てより覺悟せんこそ肝要ならめ。さあらんには、平生、勉めて正しき業務に従ひ、精々儉約を守り、金錢を貯へ置きて、是等不慮の時の用に充つべし。この心懸ある人をば、遠き慮ある人どこそいふべけれ。

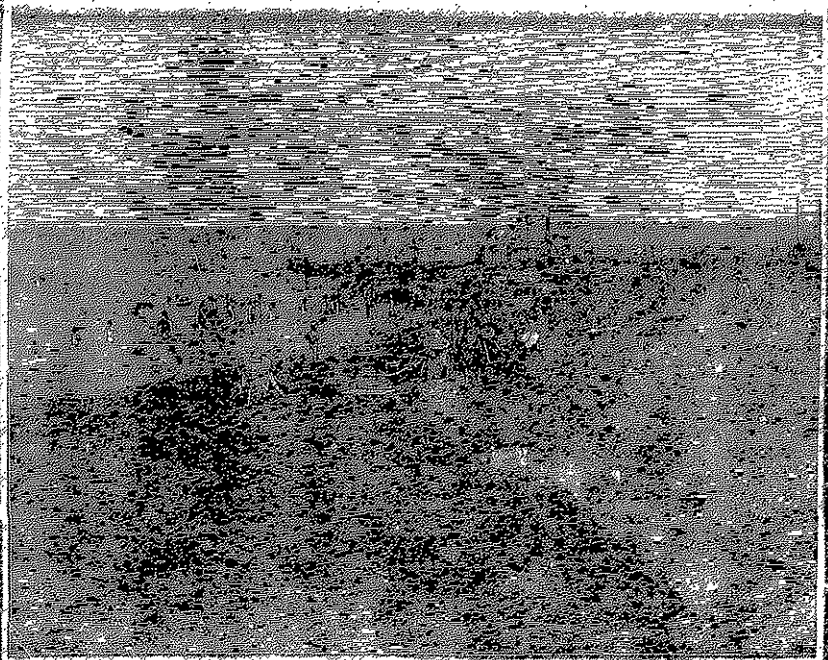
海水浴

海水浴ハ、雷ニ疾ヲ治スルノミナラズ、健康ノ身體ヲシテ、益強壯ナラシムル効アリ。總テ浴場ハ東南ニ面シ、北風ヲ避ケ、氣候ノ變化少ナク、地質ハ、岩石ニ富ミ、細砂ヲ平布シタル斜面ノ海岸ヲ良トス。潮ノ干満著シキ場所及ビ波浪ノ烈シキ場所ハ、効驗アレドモ、危險ナルヲ以テ、寧ロ之ヲ避クルニ若カズ。

浴浴ハ、通常二十日乃至三十日ノ間、日々一回時間ハ五分乃至三十分ヲ適度トス。初テ浴スル

者ハ、膚ニ赤色ヲ呈シ、細疹ヲ發シテ痒ヲ覺ユベシ。コレハ鹽分ノ刺戟ト、溫度ノ空氣ヨリ減ズルニ因ルモノニテ、日ヲ經ルニ從ヒ自ラ癒ユルモノナレバ、敢テ意トスルニ足ラズ。若シ入浴中、眩暈嘔氣等ヲ感ズルコト

海水浴ノ圖大綱



アルトキハ直チニ浴ヲ止ムベシ。強壯ノ人ハ日ヲ經ルニ從ヒ、一日二回浴スルモ害ナケレドモ其時間ハ少シク減ゼザルベカラズ。而シテ入浴ノ時刻ハ午前八時ヨリ同十一時マデヲ可トス。食事ノ前後ハ三十分乃至一時間ヲ隔ツルニアラザレバ浴スベカラズ。

凡ソ入浴スル者ハ先ヅ大ナル帽子ノ類ヲ戴キテ日光ノ直射ヲ遮ル用意ヲ爲シ而ル後徐ニ海中ニ入り、次ニ游泳シテ體ヲ運動セシムベシ、又浴ヲ出ヅレバ布ニテ全體ヲ摩シ拭フベシ。

海邊ノ空氣ハ甚ダ密ニシテ酸素ノ量多ク炭酸ヲ含ムコト少ナク殊ニ早朝ハ空氣新鮮ナレバ大ニ身體ノ健康ニ益アリ。サレバ平素虛弱ナル人ハ勿論健康ノ人モ可成時ニ海邊ニ遊ビ之ヲ呼吸スベシ。但シ日暮ハ濕氣ヲ増スモノナレバ薄着ニテ遊歩スルハ宜シカラズ。

第二十課 寒暖計

熱は萬物を膨脹せしむるの性ありて其強弱に隨ひ膨脹の度も亦強弱の差を生ず。故に物の



膨脹の度は、熱の強弱を計る尺度なりといふべし。此理に基きて造りたる一の器械あり、寒暖計是なり。

寒暖計を作るには、先づ細き玻璃管の一端球状をなせるものを取り、球の中に水銀若くはアルコールを盛り、火にかけて之を熱すれば、中なる水銀若くはアルコールは膨脹して管内に滿つべし。其時管の上端を熔かして孔を塞ぎ、暫く冷すときは、管中の水銀若くはアルコール收縮して、再び元の球中に集まり、上部に一條の空處を生ず。此空處は、即ち空氣も何もなき眞の空處なり。

さて球の中の水銀若くはアルコールは、氣候の寒暖に従ひ、管中の空處を昇降すべし。故に其昇れるを見て暑きを知り、降れるを見て寒きを知るなり。

然れども、唯是のみにては未だ委しく寒暖の差異を知るを得ず。これ其差異を知るべき度といふものあらざればなり。

度の盛り方は、前の如く出来上りたる寒暖計

萬等 體本 三十七  
の球を融けんとする氷の中に入れば、管中の水銀若くはアルコホルは忽ち降りて、或る一點に止まるべし。其止まりたる所に記號を附けて之を氷點と名く。氷點とは、水の凍る程の寒さと云ふ意味なり。

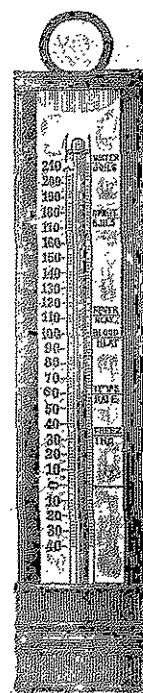
次に、之を沸騰したる湯の上に置き、蒸氣にて熱すれば、水銀著しく昇りて、上部の或る一點に止まるべし。其處にも亦記號を附けて、之を沸騰點と名く。沸騰點とは、水の沸騰する程の熱さと云ふ意味なり。

さて以上の二點定まれば、次に二點の間を、或は八十度、或は百度等程よく平等に分割して、一々其記號を附く。その數は人々の隨意なり。セルシユースと云ふ人は、之を百度に分ちて、氷點を零度とし、沸騰點を百度とせり。世に攝氏の寒暖計と云ふもの即ち是なり。又レオマルと云ふ人は、之を八十度に分ちて、氷點を零度とし、沸騰點を八十度と定めたり。之を列氏の寒暖計と云ふなり。

然れども、右二種の寒暖計は、世間用ふる者甚

だ多からず。醫者は大抵攝氏を用ふれども、通常

計温度の氏華



人の最も多く用ふるは、フアーレンハ

イトと云ふ人の度を盛りたるもの、即ち華氏の寒暖計是なり。此寒暖計は、度の盛り方前の二者と異なり。最低點即ち零度を定むるには、通常の氷を用ひずして、其中に鹽を交ぜたるものを用ひ、零度と沸騰點との間を二百十二度に分ち、三十二度の所を以て氷點と定めたり。故に華氏の三十二度は、攝氏列氏の零度と其溫度相均しき

なり。

第二十一課 孝養の訓

父母ニ事ヘテ常ニ力ヲ竭シ、時々ノ見マヒ膝下ノ事ヘ怠ラズ。古語ニ、「夕ニ定メテ朝ニ省ミル」ト云ヘルガ如クスベシ。暇無キ人モ、朝夕ノ間時々勤メテ、父母ノ前ニ侍リ事フ可シ。常ニ養ヲ省ミ、飲食ノ味佳クシテ、自ラ寒溫ノ節ヲ試ミテ進メ、冬ハ父母ヲ暖ニシ、夏ハ涼シクスベシ。外ニ出ヅルニハ必ズ父母ニ對面シ、内ニ歸レバ必ズ父母

高等小説 第三十九卷 孝  
ヲ省ル。父母ニ對シテハ、顔色ヲ溫和ニシテ、言ヲ  
荒クスベカラズ。父母ノ心ヲ怡バシメ、父母ノ身  
ヲ養フ。二ツノ勸闕ク可カラズ。是レ皆人ノ子タ  
ル者ノ定マリタル法ナリ。此法ニ背ク可カラズ。  
父母ノ事ヲ常ニ思ヒ慕ヒテ、心ニカケテ忘レザ  
ルヲ孝トス。

貝原篤信……家道訓

第二十二課 孝感 其一

今は昔寛政年間の事なり。江戶の湯島四

丁目、三郎兵衛といふものありけり。家極めて  
貧しかり。かば、商業を営むことも叶ひ難く、紙  
屑を拾ひて、僅に其日を過ごしけり。

三郎兵衛に一人の子あり、三吉とて九歳なり  
しが、或る日湯島天神に參詣せんと、家を出てつ  
る途にて、見知らぬ男、後より來り馴れくづげ  
に言葉を掛けて、懷中より菓子など取出しつゝ、  
伯父は、今より御身を好き處に連れ行かん。淺草  
の輕業か、兩國の見世物こそ面白からめ、さても  
御身の好みは何々ぞ、心のまゝに買うて得させ



高橋 蘭 本 卷之六 四十一  
ん兎もあれ伯父と與に來れよ」と曰はるゝまゝに、幼心の前後のあきまへもなく、唯善き伯父様よと思ひて、伴はれ行きけるに、これぞ世に惡むべき拐騙兒なりける。

拐騙兒は、三吉を奥州に連れゆき賣らんとて、初めこそ深切なる顔も装ひつれ、次第々々に其本色をあらはして、素足に草鞋履かせて、追立てく行きけるに、子供ながらも三吉は、かどはかされゝを覺りゝかば、後振向きシクく泣きつゝ、未だ淺草へは參らずや、兩國へは着かずやな

ど問へども、拐騙兒は更に答へず、煙草薰らゝて「グズグズ」せずと行かずやとて、牛追の轡を扱ふ如く追ひ行くに、三吉は折々立留まりて、道に落ちたる紙屑を拾ひ取りては、袂に入るゝこと頻なり。拐騙兒は怪しき事する子供よと思ひけれども、するが儘にさせて追立て行くに、紙屑を拾ふこといよく懈らず、果ては兩の袂に溢るゝばかりになりゝかば、爾は何故にかくむさくるゝきものを拾ひ集むる」と問ふに、三吉涙を浮べて、我が父上は紙屑拾なれば、これを持ち歸り

てさう上げなば如何に喜び給ふらんその御顔  
の見まほしさにかくはするなり」といふ。拐騙兒  
も其孝心の深きに驚きしが猶も二日三日と連  
れ行くに朝起くる時食事する時夜床に就かん  
とする時必ず手を合せて何やらん稱へつゝ拜  
まざることをなす。其方は何を拜む」と問ふに  
「父母の恙なくまゝまさんことを祈るなり」とて  
泣く。又折々は彼方の空を打眺めて「今頃父母は  
何をし給ふらん歸りの運きを案じ給ふべし」と  
獨こちつゝ悲み憂ふる様目も當てられぬばか

りなり。

第二十三課 孝感 其二

拐騙兒は三吉の様子を見て竊に感ずること  
大方ならず我が身の上に引較べ我が是まで父  
母に不孝なりしを慚ぢ人をかどはかす業のあ  
さましきを悔いかゝる孝行の兒を掠めて其父  
母を憂ひ悲まゝむること抑何事ぞ心なき虎狼  
さへも孝子に感ぜし事ありと聞くものを我が  
身は虎にも劣り狼にも及ばぬ心を持ちし耻か

「さよと、坐に慚愧後悔の心、胸中に湧き出で、は暫くもたへられず、いざや此子をば、是より其家に送り返さん、石を噬むとも、土を食ふとも、さては道路に餓ゑ凍へて、のたれ死をなすとも、今より決して人をかどはかすことをすまじ。それのみならず、世の人の惡いといふ事をば、兎の毛程もゆめく行ふまじと、覺悟せし上は、一刻も猶豫ならず、唯今まで叱り罵りつゝ、追ひ來りし三吉をば、俄にいたはり、伯父は元拐騙兒なり、御身をば遠き奥州に連れ行きて、賣らんと企てし

が、御身が孝心の深きに感じて、我がこれまでの惡事を悔い、これより心を改めて、善人とならんと、思ふなり、決して泣き給ふな、決して憂ひ給ふな、御身を父母が許に送り届くべし」とて、我が衣類其他を賣代なして、三吉をば馬に乗せ、駕籠に乗せて江戸に還り、湯島に到りて、夕暮の人顔知れぬ時刻をはかり、三郎兵衛が家の前に伴ひ來りて、置くや否や、忽ち何處にか影をかくしぬ。父母の喜びはいふも更なり、三吉が心の中、果して如何なりけん、其後三吉益々孝行を盡しけれ

ば其譽れ遂に官に聞えて賞金若干を賜はりぬ。かくて愈勵みて業を勉めけるより漸々に其家榮へて遂には大なる紙屋となり父の三郎兵衛老年に及びて歿せし後は其名を繼ぎて三郎兵衛と改めしに或る日一人の僧入り來りて三郎兵衛に逢はんといふ。これを一問に請ずれば、愚僧こそは昔御身をかどはかうつる惡者なれ御身が孝心の深さに感し遂に一念發起しそれより髪をれろして佛道に歸依し過去の罪障を消滅せしめんが爲に六十餘州の靈佛場を巡拜し

て今此に三十二年にして江戸に還りつるなり我が幸に今日の身となりしこと皆御身が孝心の致す所我に取りては御身は無二の善知識なり此恩を謝せんとして音づれつるなりとて三郎兵衛が父母の佛前に半日餘り讀經して遂に辭し去りぬ。此僧は後に某寺の住持となりて道德堅固の譽を揚げ三郎兵衛が家は益繁昌して福運を數世に傳へけりとぞ。

第二十四課 改過



改過とは過を改むるなり。我が惡き事を改め直すを云ふなり。人々我が惡き事を惡くとは知りながら改むる事無きは淺ましき事なり。或は惡き事を俄に改むるを耻づるは心得違なり。改めざるこそ耻かしき事なれ。改むるは人の譽むる事なり。惡き事は早く改む可きなり。

伊勢貞丈……貞丈家訓

第二十五課 土人ノ智慧

亞米利加ノ土人或ル日山ヨリ小屋ニ歸リケ

ルニ柱ニ掛ケ置キシ肉見エズナリタリ。何者ノ盗ミタルナラントアタリノ様子ヲ吟味スルニ其證跡ヲ得テケレバ土人ハ盜人ノ穿鑿ニトテ出デ行キケリ。

土人ハ森ノ中ニ尋子入リケルニ折シモ一人ノ樵夫ニ出合ヒケレバ今此邊ニ身ノ丈ケ低ク年老イタル一人ノ白人短キ鐵砲ヲ持テ短キ尾ノ小犬ヲ連レテ通行セザリシヤト問ヒケレバ樵夫ハ如何ニモサル人ヲ見受ケツト答フ。

土人之ヲ聞キテ大ニ喜ビソヤツコソ余ガ貯

高等 四十五  
ヘ置キシ肉ヲ盗ミ取りタル曲者ナレ、遠クハ行  
カジト云フニ、樵夫怪ミテ、盗人ヲカクマデ委シ  
ク知ラル、ハ何故ナルカト問フ。土人答ヘテ、サ  
レバナリ、余ガ立チテ之ヲ掛ケ置キシニ、盗ハ其  
下ニ石ヲ積ミ、踏臺トナシ、之ヲ取りタリト見ユ、  
其丈ケノ低キコト知ルベシ。又森ノ落葉ノ中ヲ  
見ルニ、其足跡ノ間狭シ、是レ老人ノ證據ナリ。又  
足ノ先キヲ外ノ方ニ踏ミ出セルハ、白人ノ證據  
ナリ。土人ナラバ足ヲ眞直ニ踏ム筈ナリ。鐵砲ヲ  
立テ掛ケタル木ニ、筒口ノ跡ツキテアリシニ、其

跡ノアル處低シ、是レ鐵砲ノ短キ證據ナリ。犬ノ  
小サキ事ハ、足跡ヲ見テ知ルベシ。其尾ノ短キコ  
トハ地ニ尾ノ形ノ付キタルヲ見テ知レリ。思フ  
ニ此犬ハ主人ノ肉ヲ盗ム間、臂ヲ据エテ居タル  
モノナラント云ヒシトゾ。其智慧アリテ注意ノ  
深キヲ知ルベシ。

第二十六課 植物の話 其三

植物の葉の形は種々にして一樣ならず、或は  
其縁邊圓くして滑なるものあり、或は帆立貝の

形を爲せるあり、或は鋸齒狀を爲せるあり、其中最も多きは橢圓形を爲せるものなり。林檎の葉の如き是なり。或は橢圓形にして甚だ長さものあり。或は丈け短くして幅廣きものあり。或は殆ど圓形をなせるものあり。或は又心臟形を爲せるものも往々これあり。斯く形狀は異なれども其色は必ず綠色を帶ぶ。

葉は概して薄く、且つ廣くして甚だ輕きものなり。其輕きが故に一樹にして幾千萬の葉を有すれども決して重いとせず。又之が爲に摧け折

るゝの憂なし。又葉は廣きが故に空氣に觸るゝ所の面甚だ大に、從て空氣中より養分を吸收し得ること容易なり。

葉の空氣中より取る所の養分とは、即ち炭酸



葉の形



葉の形

瓦斯のことにして、葉の兩面には共に表皮を有し、其裏面の表皮に無數の小孔ありて、此の小孔より空氣を通じ、葉の内部に及ぼして、其空氣中より炭酸瓦斯を取るなり。

右の如く、葉の裏面より取りたる炭酸瓦斯中の炭素は、分れて根より吸収したる養液と相混和し、始めて植物の養分とはなるなり。

葉は、風に從て震ひ搖けども、其柄くかと枝に附着せるが故に、容易に落つる憂なく。よう、其中微弱なる葉は、多少落つることあるにもせよ、尙無數の葉存するを以て、決して憂ひと爲すに足らず。此際強く圓き枝は、多少曲ることあれども、決して折るゝことなく、況や堅固なる圓き幹に於てをや。

然れども、細き針様の葉を有する植物も、亦往々これあり。松の類是なり。此外甚だ短くして厚き葉を有する植物もあり。

第二十七課 義狗

某商人アリ、一匹ノ狗ヲ畜ヒシガ、常ニ深く愛撫シテ、外ニ出ヅル毎ニ必ズ伴ヘリ。一日馬ニ騎リテ數里ノ遠ニ到リ、金貨ヲ布囊ニ納メテ齎シ歸ル。狗モ亦隨ヘリ。時シモ夏ノコトナレバ、馬ヲ路傍ノ樹陰ニ繫ギテ憩フコト暫時ノ後復々騎



リテ去ルニ、狗ハ主人ニ對シテ吠エテ已マザリ  
シカバ、主人イタク叱シテ馳セ去レリ。已ニシテ  
渡頭ニ來リ、將ニ舟ニ乘リテ渡ラントス。時ニ其  
狗復タ追ヒ來リ、忽チ馬ノ前足ヲ嚙ミ、強ヒテ主  
人ヲ抑留セントスルモノ、如シ。某怒リテ謂ヘ  
ラク、此狗狂ヲ發セシナラント。直チニ拳銃ヲ執  
リテ、ソノ腰ヲ彈射シ河ヲ渡リ去レリ。

某行クコト一里許ニシテ、忽チ金囊ヲ嚮ニ憩  
ヒシ樹陰ニ遺忘セシヲ覺リ。倉皇馳セ還レバ、狗  
ハ痛苦ヲ忍ビテ、樹陰ニ金囊ヲ守護セシガ、遙ニ

主人ヲ認メテ大ニ歡ビ、耳ヲ低レ尾ヲ搖カシ、蹠  
跟トシテ進ミ來レリ。是ニ於テ某先ニ彼ガ吠エ  
ツ、馬足ヲ嚙ミシハ、吾ヲ止メント欲スル意ナ  
リシヲ悟リ、馬ヨリ下リテ金囊ヲ收メ、狗ヲ撫シ  
テ、己ガ舉動ノ輕忽ナリシヲ謝セリ。狗ハ主人ノ  
膝ニ倚リ、歡バシゲナル一聲ヲ發シテ昏絶セリ。  
某痛恨ニ堪ヘズ、厚ク之ヲ葬リシト謂フ。

畜類トイヘドモ、義ヲ知ルコト此ノ如シ、況ヤ  
萬物ノ長タル人ニ於テヤ。

## 第二十八課 孟子之母

孟子は支那戰國の世の賢人にて、姓は孟名は軻といひき。孟子とは後の世より尊びて呼べる稱なり。其母は優れたる人にて、孟子が今の世までたふとまるゝは母の教に由る所多しとぞ。

孟子幼かりし時、其家墓場に近かりしかば、いづとなく葬送の事を見れば、はて常になのまねして遊び戯れけり。母は之を見て、此地は子を育つべき處にあらずとて、家を市中に移しけるに、孟子また商賣の事のみを見聞き、物を賣り買ひ

するさまして遊びけり。母、此處も亦子を養ふべき所にあらずとて、つひに學校の傍に家を移しけるに、此度は本を讀み、禮儀を習ふまねして、毎日遊びければ、母は始めて安堵し、終に其地に家を定めけり。

其後、孟子漸く成長し、遠方の學校に入りて勤學せしが、業未だ成らざるに、家に歸り來りぬ。折しも母は機織りてありけるが、孟子の歸れるを見て、汝は最早業を卒へて歸りしかと問ふに、未だ卒へずと答ふ。母は之を聞きもあへず、剪刀を

高等讀本 卷之二十一 五十一  
取りて、織りかけたる機を中ばより、フツリと斷ち切り、汝が學問未だ成らずして、家に歸るは、恰も我が此機を斷つに同し、何の用にもたぬとは知らずや」と諭しければ、孟子は大に其言葉に感じ、これより一心に學問を勵み、遂に世に名高き人となりなり。

第二十九課 讀書の樂

凡その事、友を得ざれば成し得べからず。只讀書の一事は、友なくて獨樂む可し。一室の内に居

て、天下四海の内を見、天地萬物の理を知り、數千年の後に在りて、數千年の前を見、今の世に在りて、古の人に對し、我が身愚にして聖賢に交る、是れ皆讀書の樂なり。凡そ萬のことゝあざの内、讀書の益に如く事なし。然るに世の人之を好まず、其不幸甚し。之を好む人は、天下の至樂を得たりと謂ふべし。

貝原篤信……樂訓

第三十課 曲亭馬琴

馬琴名は解字は瓊吉、瀧澤氏小名は倉藏、後清左衛門と改む。著作堂、簀笠漁隱等、その別號なり。父を興藏といひ、幕士松平信成に仕へて家宰たり。馬琴はそれが三男なり。明和四年深川に生れ、幼にして讀書を好み、又稗史小説を喜べり。始め龜田鵬齋に従ひて、經書を學び、又官醫山本宗英に師事せしが、皆業を卒へずして廢て、遂に當時小説の名家、山東京傳の家に寓し、熟ら來り、方行く末を思ひ廻らし、慨然として歎く、て云く、われ醫を學びてならず、儒を學びてまたならず、寧ろ



馬琴の像

稗史小説家となりて、名を後世に遺さん。是より種々の小説を述作せしが、其學は宏博、其文は絶妙にして、尋常小説家流の比に非ざりしかば、忽にして其名を天下に轟かせり。後世其體を倣ふものあれど、能く及ぶものなし。生涯著す所の小説



高橋 蘭本 卷之二十一 五十一 五十二  
雜書二百九十餘部に及べり。中にも里見八犬傳の如き全部百餘卷の多きに及び、今に至りて世人に賞翫せらるゝこと源氏物語、水滸傳にも譲らず。實に小説家の泰斗と仰ぐべし。晩年剃髪して篁民と號し、専ら著述を業とせしが、明を失ひて後は、媳婦に口授して綴らしめしもの多かりき。當時小説の流行に従ひ、稗史家競ひて新奇を構へ、盛に文を弄する餘り、大かた淫猥に流れて、風俗を亂るを以て、幕府令を出して之を禁じ、爲永春水、柳亭種彦の如き、刑に觸るゝもの多かりし。

が馬琴のみ生涯さる事もなく、年々戯作に従事するを得しは、平生の用意厚かりしによるならん。嘉永元年十一月六日、享年八十二にして歿せり。小石川深光寺に葬る。

高等讀本卷之二終

版權所有

高等讀本

全八冊

卷一 明治二十六年二月二十五日發行  
 卷二 明治二十六年二月二十五日發行  
 卷三 明治二十六年六月二十五日發行  
 卷四 明治二十六年六月二十五日發行  
 卷五 明治二十六年六月二十五日發行  
 卷六 明治二十六年六月二十五日發行  
 卷七 明治二十六年六月二十五日發行  
 卷八 明治二十六年六月二十五日發行

定價	
卷一、二、三、四、五、六、七、八各金十五錢	
卷一、二、三、四、五、六、七、八各金十七錢	

山縣佛三郎

東京府下北豐島郡上野込村十九番地

小林義則

東京市日本橋區本町四丁目十六番地

文學社

東京市日本橋區本町四丁目十六番地

文學社工場

東京市神田區錦町三丁目十二番地



著者  
 印發人  
 發行所

圖書 和圖書 備



a 1 1 1 1 0 3 9 4 4 6 a

福岡教育大学蔵書